故郷(3)

魯迅
竹内好 訳

（三十年ほど前、「私」は家の雇(やと)い人の息子(むすこ)・ルントウと知り合い、仲よくなりました。）

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は海へ貝殻(かいがら)拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、何でもあるよ。『鬼(おに)おどし』もあるし、『観音様の手』もあるよ。晩には、父ちゃんと①すいかの番に行くのさ。おまえも来いよ。」

「どろぼうの番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉(のど)が渇(かわ)いて、すいかを取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃ、どろぼうなんて思やしない。番をするのは、穴熊や、はりねずみや、チャーさ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、チャーがすいかをかじってるんだ。そうしたら、手に刺叉(さすまた)を持って、忍(しの)び寄って……。」

（中略）

「かみつかない？」

「刺叉があるじゃないか。忍び寄って、チャーを見つけたら突(つ)くのさ。あん畜生(ちくしょう)、利口だから、こっちへ走ってくるよ。そうして、股(また)をくぐって逃(に)げてしまうよ。なにしろ、毛が油みたいに滑(すべ)っこくて……。」

こんなにたくさん珍(めずら)しいことがあろうなど、それまで私は思ってもみなかった。海には、そのような五色の貝殻があるものなのか。すいかには、こんな危険な経歴があるものなのか。私はすいかといえば、②果物屋に売っているものとばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳(は)ね魚』がいっぱい跳ねるよ。みんな、かえるみたいな足が二本あって……。」

ああ、ルントウの心は神秘の宝庫で、③私の遊び仲間とは大違(ちが)いだ。こんなことは、私の友達は何も知ってはいない。ルントウが海辺にいるとき、彼(かれ)らは私と同様、高い塀(へい)に囲まれた中庭から四角な空を眺(なが)めているだけなのだ。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「すいかの番」とあるが、これはどのようなことをするのか。適当なものを選びなさい。

ア　どろぼうがすいかを取って食べないように番をする。
イ　穴熊などがすいかをかじらないように番をする。
ウ　果物屋に売られているすいかを見張る番をする。

〔　　〕

(2) ——線②「果物屋に売っているものとばかり思っていた」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア　すいかは果物屋に売られているものだと勘違い(かんちがい)していたということ。
イ　果物屋に売られていなかったので、すいかを知らなかったということ。
ウ　すいかを果物屋に売っているものとしてしか見ていなかったということ。

〔　　〕

(3) ——線③「私の遊び仲間とは大違いだ」とあるが、どのように違うのか。適当なものを選びなさい。

ア　ルントウが珍しいことをよく知っているのに対し、「私」や「私」の遊び仲間は狭(せま)い世界のことしか知らない。
イ　ルントウや「私」の遊び仲間がいろいろなものごとに詳(くわ)しいのに対し、「私」はものごとの経験が少ない。
ウ　ルントウや「私」が裕福(ゆうふく)な暮らしをしているのに対し、「私」の遊び仲間は経済的なゆとりがない。

〔　　〕